

外国語による日本研究文献の書誌学的研究

著者	藤津 滋生
雑誌名	日本研究 : 国際日本文化研究センター紀要
巻	10
ページ	403-418
発行年	1994-08-31
その他のタイトル	Foreign Literature on Japan : a Survey
URL	http://doi.org/10.15055/00000871

32 外国語による日本研究文献の 書誌学的研究

Foreign Literature on Japan : a Survey

藤 津 滋 生 (関西外国語大学)

(1) はじめに

明治初期の英国のお雇い外国人学者バジル・ホール・チェンバレン (1850—1935) はその著『日本事物誌』(*Things Japanese*, 1890 年初版) の中で、ヨーロッパの言語で書かれた日本に関する本の冊数を次のように述べている。「レオン・パジェスの『日本書誌』によれば、ヨーロッパの言語で書かれた、ほぼ直接日本について述べている本は715冊の多きにのぼっている。しかし、このリストは、おおよそ世界がまだ日本に注目するはるか以前の1859年に発表されたものである。その当時すでに700冊であったなら、現在は700の70倍に達しているであろう」(『日本関係書 Books on Japan』の項目) と。ということは、1890年、つまりチェンバレンがこの『日本事物誌』の初版を著した明治23年には700の70倍で49,000冊あるということになる。また、同じ著書の訂正5版 (1905年) [この書はよく読まれ著者の没後に訂正6版 (1939) が出版された] の同じ項目では、パジェスの代わりにヴェンクシュテルンの『日本帝国書誌』をあげ、日本に関する本は “a great many thousands of entries” と表現している。チェンバレンはいちいち数えるのが面倒になって、膨大な項目としたのであろう。この項目の内容は以下のようにになっている—「ヴェンクシュテルンの『日本帝国書誌』には無数の記載事項がある。これから考えると、日本について何も本を書いていないことが著名になる資格となりつつあるのではないかと推論できるかも知れない。日本美術、日本史、日本語、日本民俗、植物、地震、日本の疾病—これらの中のいずれも、他の多くの題目と同じく、それぞれ小さな書目がある。それから百科辞典的な著書もあれば、旅行書もある(以下略)」

それでは、外国語で著された日本研究文献は現在までにどれくらい出ているのであろうか。筆者は寡聞にしてその全貌をとりあげた文献を知らない。この稿では各種のロシア語を含めたヨーロッパ語と中国語書誌・目録から日本に関する文献がどのくらいの数になるかを、なるべく現在に近い時点で調べてみた。

(2) 包括書誌 (欧米) [発行年代順]

① レオン・パジェスの『日本書誌』(1859)

Pagès, Léon. *Bibliographie japonaise ; ou catalogue des ouvrages relatifs au Japon qui ont*

été publiés depuis le XVe siècle jusqu'à nos jours. Paris, 1859. ii, 68 p.

副題が示すように、これは15世紀以来1859年に至るまでに刊行された日本に関する著作の目録である。海外における日本関係欧文書誌の最初のものと言われている。1859年と言えば明治になる10年ほど前である。よくこれだけのものをまとめたものである。

パジェス（1814—1886）は来日したことはない。外交官として一時中国に滞在したことがある。パジェスはこの本よりも、岩波文庫にその訳が出ている『日本切支丹宗門史』で名が知られている。

さて、この書誌は年代順に並んでいる。その中は、同種、同件をまとめて同じ番号のところに置いている。関連事項の最初の刊本を基準としている。例えばNo. 1 のマルコ・ポーロ（Marco Polo）の項目には『東方見聞録』の1496年刊のヴェネチア版ほかイタリア語版数種に続き、ラテン語、仏語、独語、ポルトガル語、西語、英語の各版が記載されている。そして、1859年の自分の著で終わっている。番号がふってあって1番から658番までである。この数字はタイトルであって、収録数としては約1,347件になる。それに補遺として19件、また最終ページには写本が48件あがっている。合計で約1,414件になる。

このパジェスの書誌は以後、ヴェンクシュテルン、ナホッド、米国の「アジア学会」に継承され、15世紀半ばから現在までのほとんどの日本関係の欧文献が判然する。また、別の流れとしてコルディエの書誌もある。

なお、この覆刻版が3種類出ている。原本は貴重書であるが、こちらの方で割と簡単に見ることができる。1つはチェンバレンもあげた以下でとり上げるヴェンクシュテルンの『大日本書史』の第1巻（1895年）の付録として。2つは京都の「更生閣」から新村出の序文を付けて1927年に出版された。最後は「天理図書館善本叢書洋書之部第9次ヴァリア篇第2巻」として1976年に出された。

② フリードリヒ・フォン・ヴェンクシュテルンの『大日本書史』全2巻（1895、1907）

Wenckstern, Friedrich von. *A bibliography of the Japanese Empire ; being a classified list of all books, essays and maps in european languages relating to Dai Nihon (Great Japan) published in Europe, America and in the East from 1859~93 A. D. (VIth year of Ansei XXVIth of Meiji)*. Leiden : E. J. Brill, 1895. xiv, 338p. With : Pagès reprint. ii, 68p.

vol. 2. *Comprising the literature from 1894 to the middle of 1906 (XXVII—XXXIX th year of Meiji)*, with additions and corrections to the first volume and a supplement to L. Pagès, *Bibliographie japonaise*. Added is a list of the Swedish literature on Japan, by Miss Valfrid Palmgren. Tokyo : Maruzen, 1907. xvi, 486, 28, 21 p.

ヴェンクシュテルン（1859—1914頃）はドイツの日本研究家で、ロンドンのKegan Paul（キガン・ポール）書店の東洋部に勤務（1890—1903）。1903年（明治36）に来日して第五高等学校（熊本）で1908年（明治41）までドイツ語を教えた。明治41年5月には、『大日本書史』全2巻を著した功績により、勲四等旭日章を下賜された。1910年に帰国し1914年頃死去。（『岩波西洋人名辞典 増補版』1981.12）、（武内博編『来日西洋人名事典』日外アソシエ

ーツ1983. 3)、(上村直己論文²⁾)による。

先にあげたチェンバレンの『日本事物誌』の「日本参考書目 Bibliography」の項目には「日本に関するヨーロッパの書籍で最良のものは、フランツ・フォン・ヴェンクシュテルンの『日本帝国書誌』で、オスカー・ナホッドが1926年まで増補している。それにはレオン・パジェスの『日本書誌』の複写版が含まれている。この本は2世代〈60年〉も前に出た本である(以下略)」と評価している³⁾。また、この書誌の仕事を引き継いだナホッドはその『日本帝国書誌』の第1巻の序文で、「日本書誌の研究分野において功績が多く、疲れを知らなかったこの先駆者の早い逝去は哀惜に耐えない。我々は1914年まで親しく、励ましあいながら、意見と資料の交換を手紙で行なっていたのであるが、彼自身さらに材料を集めていたのか、またそれがどうなったのか私は知らない⁴⁾」と彼の死を悼んでいる。

これは、ヨーロッパ、アメリカ、東洋で出版された日本関係の欧文による研究書、エッセイ、地図をリストアップした目録である。研究的な見地より価値ありと認めた文献には簡単な解説を付け加えている。また、市販の図書にはその出版された最初の定価を示している。23項目に分かれた分類順目録である。特色としては、①日本関係が載っている逐次刊行物の項目を立て、その巻号順に記事を拾っていること、②『日本アジア協会紀要』は1号から21号まで5頁にわたって内容細目を録っている。ロシア語文献は除外している。本書で言及されている日本書籍のローマ字表記のアルファベット順索引と著者索引付きである。第2巻には逐次刊行物の索引がある。

パジェスの1859年(安政6)からを引き継ぎ2巻で1906年(明治39)までの文献をカバーしている。この約50年余りの間に、両巻合わせて約15,000件の文献を扱っている。

第1巻にパジェスの『日本書誌』を付録として原本通り複製して収録している。その理由として、編者は1859年以前の分もとり入れてこの目録を作成する予定であった。しかし、労力と費用の点で断念したので、パジェスのものを収録した。複製に使った原本が悪かったのか印刷が不鮮明なのが残念である。

なお、第2巻の巻末に第1巻の追加、パジェスの補遺とパルムグレン女史の日本関係スウェーデン語文献が収録されている。

覆刻版は3種類出ている。1つは、1929年に京都の「更生閣」から、2つは Stuttgart の Anton Hiersemann 社と Nendeln の Kraus Reprint 社から1970年に、3つは日本の「ひたく書房」から1980年に杉本つとむ氏の解題付きで出ている。

③ ナホッドの『日本帝国書誌』(1928—1940)

Nachod, Oskar. *Bibliographie von Japan; 1906—1926*. Enthaltend ein ausführliches Verzeichnis der Bücher und Aufsätze über Japan, die seit der Ausgabe des zweiten Bandes von Wenckstern “Bibliography of the Japanese Empire” bis 1926 in europäischen Sprachen erschienen sind. 2 Bde. London: Edward Goldston; Leipzig: Karl W. Hierseman, 1928. vol. 1: xvi, 384p., vol. 2: 385—832p.

Bd. 3: 1927—1929. Mit Ergänzungen für die Jahre 1906—1926. Leipzig, 1931. xv, 410 p.

Bd. 4: 1930-1932. Mit Ergänzungen für die Jahre 1906—1929. Aus dem Nachlass ergänzt und herausgegeben von Dr. Hans Praesent. Leipzig, 1935. xv, 351 p.

Bd. 5: 1933-1935. Mit Ergänzungen für die Jahre 1906—1932. Leipzig, 1937. xii, 452 p.

Bd. 6: 1936—1937. Mit Ergänzungen für die Jahre 1906—1935. Bearbeitet von Dr. Wolf Haenisch und Dr. Hans Praesent. Leipzig, 1940. xii, 569p.

Bd. 7: 1938—1943. この巻はプレーゼントが編集途中で残したものの印刷されずにphotocopyで、米国議会図書館に所蔵されているらしい。

ヴェンクシュテルンの続編として、3人のドイツ人の手によって編まれた膨大な書誌である。この頃になると、日本関係の欧文文献も年々増加してきて、3巻からは2、3年ごとに1冊として出ている。

編者のナホッド (1858—1933)、プレーゼント、ヘーニッシュの各氏の経歴は不明である。岩波の『西洋人名辞典』にも武内博氏の『来日西洋人名事典』にも掲載されていない。来日してこれだけの業績を残しながら、代表的な人名辞典には掲載がないということは、書誌作りは労多くして、報われることの少ない仕事だと思ったことである。なお、ナホッド氏他については以下のような石田幹之助による紹介文がある。彼は一般歴史、特に商業史の研究者で始めから日本学者として立った人ではない。1899年 (明治32年) 外遊の途中日本に立ち寄ってその歴史に興味を感じ、帰国後オランダに留学中の日本人を助手として日本歴史の述作を志した。また、1902年イスパニア・ポルトガルに旅行して日本とこれら諸国との関係史料を調査し、「各国史叢書」の1冊として日本の部を執筆した。先のヴェンクシュテルンの第2巻には9点の著作が載っている。また同氏によると、プレーゼント氏はライプツィヒの出版業者会館の図書室主幹で、日本学会の機関誌『日本』に日本関係書誌を連載していた。ヘーニッシュ氏はベルリン大学の支那学教授の息子であり、日独留学生交換で来日し京都帝国大学で学んだ。その後、ベルリンのプロイセン国立図書館の副館長を勤めた。⁵⁾

特色としては、①ロシア語文献を努めて収録していること、②日本人の著した日本関係欧文文献も収録していることである。

この目録は15項目に分かれた分類順であり、その中を細区分している項目もある。なお、5巻目から分類項目が変わる。各巻には通し番号が付いている。巻末には著者名、日本語からの翻訳書名、雑誌・年鑑の索引が付いている。

1巻: 1906—26/no. 1—4019

2巻: 1906—26/no. 4020—9575

3巻: 1927—29/no. 9576—13595 * 1906—1926の補遺を含む

4巻: 1930—32/no. 13596—18398 * 1906—1929の補遺を含む

5巻: 1933—35/no. 18399—25376 * 1906—1932の補遺を含む

6巻: 1936—37/no. 25377—33621 * 1906—1935の補遺を含む

7巻: 1938—43/no. 1—3508

以上出版された1巻 (1906年) から6巻 (1937年) にかけて、33,621件の文献数になる。なお、7巻には3,508件収録されているらしい。

これにも覆刻版が Stuttgart の Anton Hiersemann 社と Nendeln の Kraus Reprint 社から1970年に出ている。

①から③までをつなぐと15世紀末から1943年にかけて、53,543件の文献数が出たことになる。

④ コルディエの『日本書誌』(1912)

Cordier, Henri. *Bibliotheca Japonica ; dictionnaire bibliographique des ouvrages relatifs à l'Empire Japonais, rangés par ordre chronologique Jusqu'à 1870, suivi d'un appendice renfermant la liste alphabétique des principaux ouvrages parus de 1870 à 1912*. Paris: Imprimerie Nationale, 1912. xii, 762 columns.

編者のコルディエ (1849—1925) はフランスのシナ学者。アメリカのニューオーリンズに生れ、帰国して (1852)、パリ、ロンドンで教育を受けた。中国に渡り (1869)、上海の王立アジア学会北シナ図書館長となり (1871)、帰国 (1876) してパリ東洋語学校に出講 (1881)、同教授 (1883来)。“*Revue d'Extrême Orient*” (1883—87) を編集し、またスフレールと共に『通報 *T'oung-Pao*』(1890来) を刊行。彼の主な業績は、西洋におけるシナ研究の沿革およびその目録編集、ヨーロッパ諸国と極東、特にフランスと中国との関係交渉の歴史にある。その大小の著述は数百に上り、生前に1冊の目録が出来たくらいである。代表的な書誌には、『支那書誌 *Bibliotheca Sinica*』と『印度支那書誌 *Bibliotheca Indo-Sinica*』がある。(岩波、武内、石田幹之助論文による)。⁶⁾

副書名に「1870年まで、年代順に排列せる日本関係著作の書目辞典」とあるように、この書誌は年代順である。それに関係人名や主要事件を見出しにおりまぜユニークである。例えば、初めて日本人がヨーロッパの地を正式訪問した「天正遣欧使節」(Première Ambassade Japonaise 1582—1590) の項には、4人の少年使節の名前(伊藤マンショ、千々岩ミゲル、中浦ジュリアン、原マルチノ)を紹介し、長崎を出航していつローマに到着し、リスボンの訪問、そしてヴァリニャーノと共に帰国した日付が記載され、その下にこの使節を扱った種々の文献が年代順に並んでいる。

さらに、1870年までの歴史的テーマをもつ文献を加えている。そして、付録に、1870年から1912年までの著者名(一部份名)アルファベット順目録と一般索引を付けている。

収録点数は約3,500件である。扱っている年代は先のパジェスとあまり変わらないが、収録点数ははるかにパジェスを上回っている。

この書誌は、上記①～③および以下に述べる米国の「アジア学会」の書誌の系列外にあるが、編者の工夫が見られ今でも古い欧文日本関係文献を調べるのにその価値を失っていない。欧文日本古文文献を扱った古書目録にも、「コルディエの何頁」記載と載っている。

これには3つの覆刻版が出ている。1つは1932年に東京の「大岡山書店」から、2つ目は Hildesheim の George Olms 社から1969年に、3つ目は New York の Paragon Book Reprint 社から1969年に出ている。

⑤ 米国アジア学会 (The Association for Asian Studies=AAS) の『アジア研究書誌』の「日本」の項目

この書誌は以下のような変遷をたどっている。

Bulletin of Far Eastern Bibliography (1936—40)→*Far Eastern Bibliography* (1941—1945)→*Far Eastern Bibliography* (1946)→*Far Eastern Bibliography* (1947)→*Far Eastern Bibliography* (1948)→*Far Eastern Bibliography* (1949—1955)→*Bibliography of Asian Studies* (1956—)

このアジア学会はそれまでの極東学会を改組して設立されたものである。機関誌として *Journal of Asian Studies* が1956年から出ており、活発に研究活動をつづけて今日にいたっている。この雑誌の付録として出ているのが *Bibliography of Asian Studies* である。

幸いにして、1941年からの古い分には以下のような累積版が出ているので便利だ。

扱っている内容は、雑誌、単行書、雑誌論文、図書の一部で、その中は分類順に並んでいる。今までの①から④までは個人の編纂による書誌であったが、こちらは組織として手掛け現在に続いている。

以下は、日本の項目の件数である。

- a) *Cumulative bibliography of Asian Studies, 1941—1965*. Subject bibliography, vol. 3. Boston: G. K. Hall, 1970

この累積版は著者と件名に分かれている。日本の項目は件名 (Subject bibliography) で見ることができる。その中は件名のABC順に排列されている。あまりに多くて一点一点数え切れないので、頁当たりで勘定した。1頁2段組で日本の項は274頁の 'General' から 'Trade, Transportation, and, Communications' の終わりの655頁まで計382頁あり、1頁当たり30件として計算すると約11,460件になる。

- b) *Cumulative bibliography of Asian Studies, 1966—1970*. Subject bibliography, vol. 2 & 3. Boston: G. K. Hall, 1972

第2巻は677頁の 'General' から 'Foreign Relations' の終わりの750頁まで74頁ある。第3巻は1頁の 'Geography, Description and Travel' から 'Ryukyu Islands' の終わりの118頁まで118頁ある。合計で192頁あり、これも1頁2段組で頁当たり30件とすると約5,760件になる。

そして以下はモノグラフとして年刊で出版され上記の累積版に続く。日本の項目にはそれぞれに通し番号が付されているので簡単に総件数が読める。

Bibliography of Asian Studies.

- c) 1971年版 No. 3528—5934=2,407件
- d) 1972年版 No. 2027—2703= 677件
- e) 1973年版 No. 2468—3384= 917件
- f) 1974年版 No. 4411—5666=1,256件
- g) 1975年版 No. 4482—5867=1,386件
- h) 1976年版 No. 4609—6547=1,939件
- i) 1977年版 No. 4193—5583=1,391件

- j) 1978年版 No. 4658—6406=1,749件
- k) 1979年版 No. 4027—5536=1,510件
- l) 1980年版 No. 4486—6111=1,626件
- m) 1981年版 No. 4916—6407=1,492件
- n) 1982年版 No. 3918—5547=1,630件
- o) 1983年版 No. 5388—8122=2,735件
- p) 1984年版 No. 4831—6791=1,961件
- q) 1985年版 No. 5450—7946=2,527件
- r) 1986年版 No. 5399—7967=2,569件

この書誌の唯一の難点はタイムラグがあるということである。1982年版（1987年発行）からコンピュータによる編集に切り替えたようだが、最新版の1986年版の内容は1992年に発行されたものである。6年のタイムラグがある。

以上、①～⑤までの書誌でロシア語を除く（一部翻字で入っているものもある）欧文日本関係文献の内、15世紀半ばから1986年までの点数は以下のようになる。

①パジェス	約1,414件
②ヴェンクシュテルン	約15,000件
③ナホッド、プレーゼント、ヘーニッシュ	約37,129件
④アジア研究書誌の「日本」の項目	
累積版（1941—65）	約11,460件
累積版（1966—79）	約5,760件
1971—1986	27,772件
	小計約44,992件

日本関係欧文文献の総数は①から④までを足すと約98,535件になる。①のパジェスのかわりにコルディエにすると約100,621件になる。

(3) 包括書誌（旧ロシア、旧ソ連）

① メジョフの『アジア書誌』の日本の項目（1891—1894）

Межов, В. И. сост. Библиография Азии. Указатель книг и статей об Азии на русском языке и одних только книг на иностранных языках, касающихся отношений России к азиатским государствам. СПб., 1891. 230 стр. [О Японии см. стр. 140-153]

旧ロシアで最初に出たシベリア関係を除く、東洋関係文献目録である。メジョフはこの書誌と対をなす『シベリア書誌』を同時に出版している。メジョフの詳しい経歴は不明である。

この書誌の収録資料は18世紀初期から1880年代末までを扱っており、分類順に並んでいる。索引がないので不便である。日本の項目は第1巻第2部のNo.3104—3439に収録されている。合計で336件である。

② マトヴェーエフ、ポポフ共編の「日本書誌」(1923)

Матвеев, З. Н., Попов, А. Д. Библиография Японии. Под. ред. Е. Г. Спасьвина. Ч. 1-2. Владивосток, 1923. 117, 13 стр.

初めて日本だけに的をしぼった書誌である。1923年、10月革命後にまとめられた。国際十進分類法(UDC)によって分類されている。2部に分かれ、第1部は旧ロシアの文献を1,845件収め、第2部は1915—1922年の革命前後に出た文献と補遺を合わせ255件、両部合計で2,100件になる。巻末に著者索引と出版機関名の略語表が付いている。いうまでもなく、この書誌は上記メジョフの「日本書誌の項目」に続くものである。

③ 旧ソ連科学アカデミー編の『日本書誌 1917—1958』(1960)

Академия Наук СССР. Институт народов Азии. Библиография Японии: литература, изданная в Советском Союзе на русском языке с 1917 по 1958 г. Составители: В. А. Власов, и др. Ответственные редакторы: М. И. Лукьянова, и др. Москва: Изд-во восточной литературы, 1960. 328 стр.

旧ソ連科学アカデミー内のアジア民族研究所の編集になる分類順目録であり、その中は大きく18項目に分け、細区分しているところもある。合計で6,249件になり、一番件数の多いのが、9「日本の軍国主義とファシズムならびにその帝国主義的侵略」の1,735件で、全体の28%になる。次は10「対外政策」の1,355件で22%になる。この2つで全体の半分になり、旧ソ連における初期の日本研究がいわゆる軍事、外交、政治に片寄っていたことが分かる。3番目は「経済」、4番目「歴史」の順となる。巻末に著者索引が付いている。ちなみに、この書誌は1,600部出版された。

覆刻版が日本のナウカ書店から1979年に出ている。

④ 旧ソ連科学アカデミー編の『日本書誌 1734—1917』(1965)

Библиография Японии: литература, изданная в России с 1734 по 1917 г. [Составители: В. С. Гривнин и др. Ответст. редакторы: М. И. Лукьянова и др.] Москва, 1965. 378 стр.

これは、①、②の個人あるいは共編で作った旧書誌を増補集大成したものである。だからこの1冊さえあれば、メジョフ、マトヴェーエフ・ポポフの編集した2冊の書誌は不要となった。

ここでは発行年代順としたので、③と扱っている年代が逆になった。

上記と同じく分類順目録で、その中は大きく15項目に分け、細区分しているところもある。合計で7,897件になり、一番件数の多いのは3「経済」の1,341件で全体の17%になる。2番目が2「地理・民族」の784件で10%になる。3番目は9「軍事」、4番目は6「歴史」の順になる。巻末に著者索引付き。これは1,000部出版された。

これも日本のナウカ書店から1979年に覆刻版が出ている。

⑤ 旧ソ連科学アカデミー編の『日本書誌 1959—1973』(1984)

Библиография Японии: литература, изданная в советском союзе на русском языке с 1959 по 1973 г.

Москва, 1984. 336 стр.

いうまでもなく、③に続く。同じく、分類順目録で、その中は19項目に分け、細区分しているところもある。この旧ソ連科学アカデミー編の『書誌』は3点とも分類項目が異なっている。合計で5,172件になり、一番点数が多いのは5「経済」で1,199件で全体の23%になる。次が16「文学」の1,020件で20%になる。3番目が8「歴史」、4番目は9「外交」の順になる。これも著者索引付き。これは1,500部出版された。同じく覆刻版がナウカ書店から1987年に出ている。

以上3点の旧ソ連科学アカデミー編の書誌の一部を収録したものが、岩崎学術出版から『10月革命50周年記念 日ソ関係図書総覧1917-1967』（1967年）として出ている。

この3点の書誌により、1734年（この年にロシアで『日本誌』が刊行されたとされる）から1973年（昭和48年）までの旧ロシア、旧ソ連における日本研究文献を知ることができる。

①1734—1917 7,897件

②1917—1958 6,249件

③1959—1973 5,172件

計 19,318件

残念ながら、1973年以降のロシア語文献でまとまったものが出ていない。

但し、旧ソ連における『日本・年鑑 IApponia: Ezhegodnik』の「日本文献」には1972年から最新版の1988年まで、ロシア語、日本語、ヨーロッパ語による3種の単行本文献が巻末に記載されており、最新のものはこれで見ることができる。以下に、ロシア語の各年代の単行本の数を示そう。

- | | |
|---------------|---------------|
| a) 1973年版 34件 | j) 1981年版 16件 |
| b) 1973年版 10件 | k) 1982年版 24件 |
| c) 1974年版 12件 | l) 1983年版 14件 |
| d) 1975年版 18件 | m) 1984年版 22件 |
| e) 1976年版 17件 | n) 1985年版 15件 |
| f) 1977年版 14件 | o) 1986年版 29件 |
| g) 1978年版 18件 | p) 1987年版 24件 |
| h) 1979年版 16件 | q) 1988年版 26件 |
| i) 1980年版 20件 | |

合計 329件

とすると、ロシア語文献は1988年までに19,647件になる。

なお、Inoue Kōichi 氏は1974—1989には概算で5,000件ぐらいだろうと言われている⁷⁾（この数字は雑誌論文なども含めたものだろう）。とするとロシア語文献は1989年（平成元年）までに24,318件ほどになる。

(4) 包括書誌（中国）

李玉・劉玉敏・張貴来編『中国日本学編著索引 1949—1988』北京大学出版社 1991.4 14,

557p. (北京大学日本研究叢書)

これは昭和24年から昭和63年までの40年間にわたる中国本土における日本学の成果をまとめた書誌である。

大きく、著作、論文、訳書、翻訳論文の4つに分け、その中を分類順に細区分している。収録件数は、単行本580件、論文8,119件、訳書1,147件、翻訳論文2,942件、合計で12,788件になる。巻末に雑誌索引が付いている。

(5) 包括書誌 (一言語・ドイツ語)

これは、(2)の包括書誌 (欧米) ともいえるし、次の総合目録ともいえる。

これまで、ドイツ語はもちろん他のヨーロッパ語 (ロシア語は省く) による単独の日本関係書誌はなかった。最近2つのドイツ語による書誌が出た。ドイツ人の勤勉で、骨身を惜しまない、秩序を好む国民性によるのか、今まで見てきたように日本関係の欧文書誌を個人で作ったのは大部分ドイツ人であるし、次項のトラウト博士もカピツァ氏もドイツ人である。以下2つの書誌もドイツ人による日本単独の書誌である。

① フォルマネク、ゲトロイヤー両氏による『ドイツ語による日本文献目録 1980—1987』(1989)

Verzeichnis des deutschsprachigen Japan-Schrifttums 1980—1987, Erstellt von Susanne Formanek und Peter Getreuer. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 1989. 194 p.

年代は限られているものの、自然科学を除く単行本、雑誌論文を収録した日本関係のドイツ語文献である。

Abe, Kôbôからアルファベット順に並んでいる。1から順番に番号が付いていて総件数では4,512件である。ドイツ語単独で7年間にこれだけ出ているのは多いような気がして内容を見てみると、例えば日本人による「日本における中高ドイツ文学」という論文まで入っている。

前の方に、分野別の一覧表とその分野別に本文の文献番号を記入した索引が付き、最後に著者索引が付いている。これはデータベース化されている。

② ハダミツキ、コックス両氏による『日本書誌』(1990—)

Japan-Bibliografie: Verzeichnis deutschsprachiger japanbezogener Veröffentlichungen. Reihe A: Monografien, Zeitschriften, Karten. Band 1: 1477—1920. München: K. G. Saur, 1990.

驚くべき書誌である。20項目に分かれた分類順目録であるが、1番から通し番号が付いていて、何と10万の位が取ってある。それもそのはずで、以下のような遠大な計画が前書きに発表されている。

Reihe A (Monografien, Reihe B
Zeitschriften, Karten) (Aufsätze)

Band 1: 1477—1920 Band 1: —1920

Band 2: 1921—1950 Band 2: 1921—1950

Band 3: 1951—1985 Band 3: 1951—1985

また、驚くべきことに、ドイツ国内、英仏の国立図書館、日本の代表的な図書館、カナダの図書館、そして何とアメリカ各州のほとんどの公共、大学、専門図書館の所在記録が付されていることである。ちなみに、日本の図書館は、国立国会図書館、東京大学図書館、上智大学図書館、国際基督教大学図書館、東洋文庫、慶応義塾大学図書館、Deutsche Gesellschaft für Natur-und Völkerkunde Ostasiens, Bibliothek, Tokyo、天理図書館、東北大学図書館、京都外国語大学図書館の10館である。なぜ、欧文日本関係の文献を継続的に収集している国際文化会館図書館や国際交流基金図書館を省いたのかが不思議である。

このシリーズA、Bd. 1. の総点数は3,231件である。ただ、惜しいことにドイツ語文献だけである。

(6) 総合目録（ユニオンカタログ）〔発行年順〕

ここでは主に、各種の総合目録から日本関係欧文の単行書の件数を調べてみる。

① ベルリン日本研究所・京都ドイツ文化研究所編『古日本文献目録』（1940）

Bibliographischer Alt-Japan Katalog 1542—1853. Bearb. u. hrsg. vom Japaninstitut in Berlin u. vom Deutschen Forschungsinstitut in Kyoto. Kyoto, 1940.

これはドイツにある日本研究所と日本にあるドイツ文化研究所の2つの機関と人が協力して編集した欧文古日本関係文献の合同目録である。前者は1925年に設立、後者は1934年に設立された。第二次世界大戦前に発行された最初の総合目録であると同時に、その所蔵機関名をも示している。

ドイツ図書館の大多数ならびにオーストリア図書館の数か所に所蔵せる文献と日本の主要図書館に所蔵する1542年のポルトガル人による日本発見から1853年のペリー提督による日本開国に至る間にヨーロッパで印刷・刊行されたいわゆる古文献目録である。

実際作業に当たったのは、ベルリン日本研究所主事のトラウト (F. M. Trautz) 博士である。博士は来日中に病に倒れ帰国した。この本をドイツで印刷する予定であったが出来ず、出版を見ずに1938年春に亡くなった。博士の後を継いだのは京都帝国大学図書館に勤務の谷口寛一郎、山本賢治の2人である。他に、同じ図書館の鈴鹿三七、山鹿誠之助、天野敬太郎、重久篤太郎の4氏への謝辞が記載されている。

日本各地の図書館に協力を依頼した数は約100館であった。この内この目録に収録したものは、旧帝大他主要私立大学付属図書館および研究所付属図書館の18機関である。数多くの文献を所蔵する天理図書館、東洋文庫、国際文化振興会は収録されなかった。

編集に当っては、先のコルディエ、ヴェンクシュテルン、ナホッド等の「日本文献欧文目録」を参考にした。この目録の何と4分の1はヴェンクシュテルン、コルディエに未収録のものであるらしい。

著者名順目録で、同一著者のものは年代順に並んでいる。通し番号が付いていて収録総数

は1,624件である。最後に日独の所蔵機関名索引が付いている。

覆刻版がミュンヘンのドキュメンテーション出版から1977年に出ている。

『古日本文献目録』が出たついでに、もう一つ最近ドイツで出たすばらしい成果を紹介しておきたい。それは、同じくドイツ人のペーター・カピツァ氏 (Peter Kapitza) が編纂された『ヨーロッパにおける日本 *Japan in Europa: Texte und Bilddokumente zur europäischen Japankenntnis von Marco Polo bis Wilhelm Humboldt*. München: Iudicium, 1990』である。「テキストと図版で示すマルコ・ポーロからヴィルヘルム・フォン・フンボルトにいたるヨーロッパの日本理解」と副題にあるように、主に独・英・仏語で書かれた日本に関する報告書、旅行記、学術書はもちろん百科事典の項目や詩、小説などから取り出した解題、図版入りの古日本文献目録である。1298/99のマルコ・ポーロの写本『*Il Milione* 東方見聞録』から1826年のフンボルトの『ロドリゲスとオヤングレンの日本語文法の比較概説 *Notice comparative des grammaires japonaises des PP. Rodriguez et Oyanguren*』まで2巻合わせて462件の古文獻を扱っている。1巻が957頁、2巻が1,024頁、それに96頁の索引が付いている膨大かつ詳細な解題付目録である。

② 福田なをみ編『欧文日本関係総合目録』(1967)

Union catalog of books on Japan in western languages. Ed. by Naomi Fukuda. International House Library, 1967. iv, 543p.

これはわが国におけるその所蔵機関名を記した最初の総合目録である。

編者の福田なをみ女史は、アン・アーバーのミシガン大学で歴史を修め、また同大学の図書館学校を卒業。昭和28—45年まで17年間、国際文化会館の図書館長を勤められた。後、ミシガン大学へ移られた。鈴木平八郎氏によると、彼女の活躍を大まかに分けると、第1に、国内の重要図書館建設の推進、第2に、戦後の図書館復興を担うべき図書館人の養成、第3に、書誌作成その他の図書館業務上の貢献ということになろう、⁸⁾とっておられる。後、勲四等宝冠章を受賞された。現在は高齢で引退されている。

所蔵機関名は、国際文化会館、国際文化振興会、国立国会図書館、東洋文庫、上野図書館(国立国会図書館支部)の5機関である。国際文化会館を除く4機関には以下のようにそれぞれ冊子体蔵書目録があり、それに自己の蔵書を含めて編纂した。

国際文化振興会図書室は、1938年と1967年(増補改訂版)の2度にわたって冊子体目録を刊行した。国立国会図書館は、1948.4—1962.12までの日本関係欧文図書目録の予備版を1963年に刊行した。東洋文庫(1917年創立、1948年以来国立国会図書館支部となった)は、モリソン文庫中の日本関係欧文図書を主体とした1917—1956年までの目録を1957年に、同著者索引を別冊として1959年に刊行した。最後に、上野図書館は、1872—1960年までの日本関係欧文図書目録を1966年に刊行した。

ここで扱った文献は、日本に限定した図書あるいはモノグラフィック・ワークスであり、アジアに関するものや雑誌論文は省いてある。日本関係貴重書は入っている。

著編者のアルファベット順目録で、収録件数は9,393件である。索引は無い。

③ 国際基督教大学図書館・国際文化会館図書室編『英文日本関係図書』（1984）

Books on Japan in English: joint holding list of ICU Library and IHJ Library, Sept., 1983. Tokyo: ICU Library, 1984. vi, 683 p.

これは、国際基督教大学（ICU）（1953年に4年制大学が設立された）図書館と財団法人国際文化会館（IHJ）（1952年設立）図書室（1955年開館）が所蔵する英文の日本関係図書、日本の図書の英訳本、及び小冊子目録である。主として人文・社会科学が占める。

前者は、留学生の占める割合が高く、日本関係の欧文図書を継続的に収集している。また、後者は学術・文化の国際交流を目的として設立された財団法人で、内外の研究者のために同種の図書を収集している。両機関共、40年余りの歴史がある。なお、国際文化会館は以前 *Books on Japan, a list of acquisitions, 1955—1970* という冊子目録を刊行している。

厳密には2機関で英文のみという制約があり、統合目録とは言えないが、総合目録をめざす第一歩として位置付けられると思う。

収録件数は1983年9月現在で5,860件である。日本十進分類法（NDC）による分類目録である。巻末に著者索引と書名索引が付いていて検索に便利である。

④ 『国立国会図書館所蔵 日本関係欧文図書目録 昭和23—50年』紀伊国屋書店（1977）

Catalog of materials on Japan in western languages in the National Diet Library 1948—1975. vii, 388 p.

これこそ厳密には、総合目録ではない。しかし、国の中央図書館である国立国会図書館（1948年創立）はその収書方針に「内外で刊行されるその国に関する研究書を可能な限り収集、整理すること」をうたっている。だから、わが国においては、こうした日本関係書は国立国会図書館が一番の蔵書数を誇っていると思われる。また、旧上野図書館の分も引き継いでいる。だから、ここから出る目録が一応の総合目録だと言えないこともない。

大きく総記、人文科学、社会科学、科学技術の4部門に分けた分類順目録である。約7,800点を収録。ロシア語文献も入っている。巻末に著者索引が付いている。

林杲之介氏によると、②の7,000—8,000タイトル（実際は9,393件である）に1,000—2,000タイトルを加えた10,000タイトルが、1970年の概略であると言っておられる⁹⁾。

⑤ 『英文日本関係図書目録』国際交流基金（1986）

Catalogue of books in English on Japan 1945—1981. Tokyo: The Japan Foundation, 1986. viii, 726p.

これは上記③と似たものである。国立国会図書館と国際交流基金本部図書館とが所蔵しているものと、米国アジア学会の *Bibliography of Asian Studies* の1973年版までの‘Japan’の項目と米国の『全米総合図書目録』（National Union Catalog）に共通して採録されている収録図書を対象とした英語で書かれた日本関係図書目録である。パンフレット、マイクロフィルム等は省いてある。

収録年代は1945年から1981年にかけて刊行されたものを採録している。

国際交流基金（Japan Foundation）は対外文化交流活動の増進を目的として、1972年に設立された外務省所管の特殊法人である。その前身は1934年設立の国際文化振興会（Japan Cultural Society=KBS）である。戦前から活動しているので貴重書も所蔵している。

日本を主題とした人文、社会科学及び芸術分野の図書を対象とした分類順目録で、NDC第8版によっている。各記述の最後に情報源の略号が記されていて便利だ。著者索引と書名索引が付いている。通し番号が付いていて収録件数は8,942件である。

1945—1981年間の日本関係英語文献についてはほぼ網羅しているのではないと思われる。

なお、この冊子体目録はデータベースとしてコンピュータに入力した内容にもとづいている。

日本関係欧文図書目録の内、英語で書かれた分については③と⑤でほぼ完璧と思われる。英語以外のヨーロッパ語による総合目録の刊行が待たれる。

⑥ 国立国会図書館専門資料部編『国立国会図書館所蔵 日本関係欧文図書目録 昭和51年—61年』紀伊国屋書店 1992.10 xi, 331 p.

Catalog of materials on Japan in western languages in the National Diet Library 1976—1986.

上記④の続きである。件数としては、4,700件である。同じく分類順で、巻末に著者索引と書名索引が付いている。ロシア語も入っている。

国立国会図書館には昭和23年の創立から昭和61年までに12,500件、それに旧上野図書館の分約5,000件、支部図書館の東洋文庫分4,790を合計すると、22,290件所蔵していることになる。

上記各機関以外にも、日本各地の主要大学図書館や専門図書館はそれぞれかなりの量と質の新旧の日本関係外国語資料を収集、所蔵していて、「日本」を主題とした冊子目録を出しているが（「日本」関係は出してなくてもすばらしいコレクションを持っている機関もある）、ここでは省いた。例えば、京都外国語大学、京都大学人文科学研究所、同東南アジア研究所、東京女子大学付属比較文化研究所、日仏会館、横浜開港資料館、貿易研修センター、西南学院大学の各図書館、「日本」に限定した冊子目録を出していない機関では、天理大学、近畿大学、国際日本文化研究センター図書館などに充実したコレクションがある。

なお、各国における日本文学の翻訳、日本語、日本経済、教育などの特定分野の書誌は出ているが、この稿では省いた。また、各国、各国語による解題付きの書誌や選択書誌もかなり出ているが、日本研究文献の総数をつかむのには不適當なのでこれも省いた。

(7) おわりに

ロシア語を含めた日本関係欧文文献は15世紀の半ばから1989年（この年はロシア語文献の上限である）までに、概算で122,853件になる。そして、戦後の中国語文献12,788件を加え

ると、135,641件になる。パジェスのかわりにコルディエでとると、2,000件ばかり増える。筆者の予想では、中国語、ロシア語を含めた外国語による日本関係文献はおおよそ15世紀半ばから1992年現在までに**16万件**にはなるだろうとふんでいる。言っておかなければならないのは、この数字は雑誌、雑誌論文、小冊子、単行本、地図、博士論文などを含めた数字であるということである。

このうち、欧文による日本関係の単行本の数は、国立国会図書館の冊子目録で計算すると1948—1986年の2冊分の目録で12,500件、支部上野図書館旧蔵分(1872—1960年)が約5,000件、支部東洋文庫分(1917—1956年)が4,790件になる。つまり、1872年から1986年までの合計は22,290件になる。それに、1872年以前の古文書を扱った『古日本文献目録』(1542—1853)の1,624件を加えると23,914件になる。これに、(4)の文献で中国語の単行本の580件、訳書1,147件を合計すると25,641件になる。1986年から1992年までの6年間分の予想は年に約300点の単行本が出るとして1,800件。総合計では27,441件になる。筆者の予想では1542年から1992年までにおよそ**3万点**ぐらいと予想している。この数字が多いか少ないかについては判断の分かれるところであろう。

ドイツのハダミツキとコックス両氏によって計画されている日本の図書館も含めた世界各国の図書館が所蔵するドイツ語による日本文献の総合目録作成という遠大な計画をみるにつけ、せめて日本に関する外国語資料を集中的に収集しているわが国の図書館が協力して「日本」を主題にしたデータベースなり総合目録を作って欲しいことを希望する。

遺憾に思うのは、今回中国本土を除く東南アジア諸国など非ヨーロッパ語圏の日本関係文献が調査出来なかったことである。これからの課題である。

最後に、資料閲覧の点で、国際日本文化研究センターの図書館にはひとかたならぬお世話になった。一言お礼を申し上げて拙稿を終わりたい。

[注]

- 1) 訳は第6版によった。

チェンバレン著 高梨健吉訳『日本事物誌：1』平凡社 1969.1 p. 65 (東洋文庫；131)

- 2) 上村直己『『大日本書史』編者ウェンクシュテルン』『書誌索引展望』8(2)、1984.5 pp. 32—35.

- 3) 「前掲」チェンバレン p. 63.

- 4) 訳は「前掲」上村による p. 35.

- 5) 石田幹之助「日本関係西籍目録に就いて」『石田幹之助著作集：3：東洋学雑鈔』六興出版 1986.2 p. 337.

- 6) 同上 pp. 328—329.

- 7) Inoue, Kōichi. Soviet Japanology and Russian Japanology. Harumi Befu and Josef Kreiner (eds) *Othernesses of Japan; historical and cultural influences on Japanese studies in ten countries*. München: Iudicium-Verl., 1992. p. 270.

- 8) 鈴木平八郎「ひと 福田なをみ：わが国図書館界発展の裏方」『ライブラリアンズ・フォーラム』1(1)、1984 Spring. pp. 21—24.

- 9) 林杲之介「日本関係欧文図書書誌」『参考書誌研究』1、1970.11 p. 82.

[参考文献] (注以外のもの) (著者順)

- (1) 林杲之介「日本関係欧文図書の収集と問題点」『参考書誌研究』3、1971.9 pp. 21—25.
- (2) Sonoda, Hidehiro. Transmission and reception of information on Japanese studies; information programme of the International Research Center for Japanese Studies. Yu-ying Brown (ed). *Japanese studies; papers presented at a colloquium at the School of Oriental and African Studies, 14—16 September 1988*. London: The British Library, 1990. pp. 298—306.
- (3) 杉本つとむ「ウェンクスタン『大日本書史』」第1巻解題 東京 ひたく書房 1980. pp. 3—9.
- (4) 高木浩子「ドイツにおける日本研究及び日本関係書誌」『参考書誌研究』40、1991.11. pp. 1—8.
- (5) 八木佐吉「欧文『日本関係文献目録』」『天理図書館善本叢書洋書之部解説: 9』1976. pp. 25—29.
- (6) 吉田小五郎「前書」『レオン・パジェス日本切支丹宗門史; 上巻』岩波書店 1938.3 pp. 6—8. (岩波文庫)